



名寄市立大学の窓から

知への誘い

vol.109

農福連携とはなんだろう？

保健福祉学部 社会福祉学科 講師 小泉 隆文



私は、地域福祉や障害者福祉に関するテーマを研究しており、特に「農福連携」について研究しています。

この「農福連携」という言葉は近頃耳にする機会が増え、ご存知の方も多いと思います。農福連携とは文字通り「農業」と「福祉」が連携することを指します。

この言葉が使われ始めたのは2010年頃ですが、その以前から農福連携は行われていました。当初は、農業分野で不足している労働力を、障害のある方々に補ってもらおう目的でその取り組みが始まりました。現在では、高齢者を対象に認知症予防として行ったり、生活困窮者の就労準備として行ったり、また刑務所を出所した人が就労準備のために行ったりなど、農作業の裾野は広がっています。さらに、障害者、高齢者、子

どもたちやその家族が一堂に会して農作業を行い、収穫した野菜をみんなで販売したり、料理をして楽しみながら交流するといったコミュニケーションも生まれています。



では、実際に農福連携とはどのような作業を指すのでしょうか。ここでは障害者の例を取り上げますが、障害者が農作業を行うことはもちろんのこと、障害者が農作業を行って生産した農産物の仕分けや加工、販売も農福連携といえます。また、農作業も種まき、収穫、除草だけではなく、大型コンテナの組み立てなども農福連携といえるでしょう。代表的な農福連携の形態は、障害福祉サービス事業所(いわゆる障害者施設)

が施設外就労として農家を手伝うこと(援農)や、農家が障害者を雇用する、障害者がJAなどの選果場や加工場に行つて作業する、農家が障害福祉サービスを立ち上げて作業委託する、障害福祉サービスが農業法人を立ち上げる(農地法特例により、社会福祉事業を行うことを目的として設立された法人は、農業委員会の許可を得て農地所有適格法人の要件などを満たさなくても農地を購入・借入することができません)などがあります。

名寄市の基幹産業は農業です。しかし、農業就業人口は減少の一途をたどっています。農福連携は、農家から見れば労働力の確保につながりますし、障害者から見れば体力増進や社会参加、また農作業を続けることで自信になるというメリットにつながります。障害者が農家へ作業に行く場合、障害福祉サービス事業所の利用者、支援者と農家が連携することが必要不可欠です。障害は一人一人特性が異なりますが、農家の人はその点をよくわからないため、実習という形で障害者に何通りかの作業をしてもらい、その様子を見て、本人にどの作業をしたいかを聞き、支援者に障害者の得意な点や困った時の対処方法などを聞きながら進めていくのが良い方法の一つだと思います。農作業の分解など、障害者本人や支援者と労働環境を改善していけば、安定的に農作業に従事することが可能となるでしょう。

大学図書館へようこそ！

今月13日(火)18時30分から、大学図書館 プレゼンテーションルームで「サイエンスカフェ」が開催されます。また、図書館内特設ギャラリーにて、堀川真教授『私の名前は宗谷本線』の絵本原画が展示されています。

【12月の開館について】
月曜～土曜は9時～21時までの通常開館、27日(火)と28日(水)は17時までの短縮開館となります。日曜・祝日は休館です。今年度から年末年始の休館が、12月29日(木)から1月3日(火)までとなります。

◆問い合わせ
名寄市立大学図書館
☎01654@7671(直通)
✉ncu_library@nayoro.ac.jp

大学図書館にはこんな本があります

～「知」への誘い～からもう1歩～
農福連携について書かれた本をご紹介します。

『農福一体のソーシャルファーム～埼玉福興の取り組みから～』
新井 利昌/著、創森社
→第3の就労形態といわれる農業と福祉の出会い。ともに働き、ともに生きていくことのできるすべてが「出会い」から始まった。

『憲農福連携の「里マチ」づくり』
濱田 健司/著、鹿島出版会
→多様ないのちが共に学び、共に生きる「里マチ」＝「農生都市」とはどのようなことか。農を水平方向と垂直方向へと広げ、多くの新しい価値を生み出し、最終的には農福商工連携をめざす。

『農の福祉力で地域が輝く～農福+α連携の新展開～』
濱田 健司/著、創森社
→「農の福祉力」とは何か。各自が役割を持つことで地域課題を解決し、地域を共に創生、「共創・共生」していくことにつながる。「農福連携」はそのきっかけと成り得る。